

## グリムメルヒェンのモチーフを探る(5)

### — 刑罰と残忍性 (下) —

満足 忍

## Studies on the motives in “Grimm’s Märchen”(5)

### — punishment and brutality (part3) —

Shinobu Manzoku

本誌第 30 号ならびに第 31 号に引き続き、本稿ではグリム童話における以下の各モチーフを分類し、その描写を抽出し、報告する。

- [14 毒殺]
- [15 こん棒で一撃, 薪割り・斧で一撃, 殴り殺す]
- [16 塔・牢等に隔離]
- [17 森の中への子捨て]
- [18 特に方法の記述がない死刑]
- [19 自殺]
- [20 その他の死(事故死, 疲れての死)]
- [21 その他の残忍な描写]

なお、(上)(中)の報告と同様に、本稿(下)でもグリム童話に国際的に使用されている KHM 1~210 の番号に準拠し、日本語訳は『グリム童話全集 I~III』(高橋健二訳)から引用し、なるべく手を加えずに < > 内に示した。

#### [14 毒殺]

動物や植物の毒は矢毒などとして狩猟などに用いられ、その歴史は古く、毒は一般に容易に手にすることができた。しかし一方で、KHM に毒が用いられているのは以下の 2 例のみであるのは意外であり、毒は KHM ではあまり用いら

れていない。主人公が旅に出るなどの行動の契機となる「生命の水」「生命の薬草」「生命のりんご」が好まれている一方で、毒が用いられない理由は、毒による処刑は、火あぶりや首切りの刑に比べ、長い時間の苦しみを伴うこともなく、見せしめとしての効果が薄いためであろう。また、魔法による再生や救済の手段としても不向きであるからと考えられる。

★KHM 22(なぞ)：魔女が毒入りの飲み物で王子殺害を計画→毒が馬から鳥を経て、最後は魔女自身も死ぬ。

<女の子(魔女の娘)は 2 人(王子とその召使い)に、気をつけなさい、……お婆さん(魔女)は悪い飲み物をこしらえているから、と注意しました>。魔女は毒入りの飲み物を召使いに渡し<『おまえさんの主人にこれを渡しなさい』と、彼女が言ったとたんにガラスが割れて、毒が馬にはねかえりました。毒がひどかったので、馬はたちどころに倒れて死にました>。死んだ馬を食べた鳥を召使いが宿屋(人殺しのねぐら)で料理してもらう。2 人の旅人を殺害して強奪を企てていた 12 人の人殺しと魔女が鳥の肉の刻み込んであったスープを、<2 口 3 口飲み込むやいなや、みんな倒れて死にました。毒が馬の肉

から鳥に伝わっていたからです)。

\*鳥は悪魔の使いとして頻繁に登場する動物である。その鳥の毒が巡り巡って終には魔女とその一団を死に追いやるといった自業自得の結末にこの話の痛快さが伺える。

★KHM 53(白雪姫)：飾り紐、毒の櫛で殺害を計画→未遂。続いて毒のりんごによる殺害→死(長い眠り)→再生。

国中で一番美しくなくては、嫉ましくて、じっとしていらなかった后(継母)は白雪姫の殺害を計画する。〈櫛が髪の毛の中に入ると、たちまち毒が効いて、白雪姫は気を失って倒れました〉。〈毒のあるりんごを作りました。……一切れでも食べると死ぬに決まっています。……それを一切れ口の中に入れると、たちまち白雪姫はぱったり床に倒れて死にました〉。

\*嫉妬する妃の目的は、白雪姫に苦しみを与えるのではなく、この世から即刻葬ることにある。そのため、櫛やりんごには速効性が求められる。特にりんごは、古くから豊饒や知恵のシンボルとする信仰的要素を持っており、例えば「生命のりんご」は生命と若さを与えてくれるものと信じられていることから、人を魅了する力を有している。また、りんごは成熟した女性の性的欲望であるとも解されている。そして咽に詰まった毒のりんごは、第三者の力や魔法から救済を必要とせず、白雪姫の後の偶然の再生、王子との結婚を視野に入れた格好のモチーフとなっている。この話のように、死と眠りを同一視する傾向は、信仰、慣習、伝説、昔話に頻繁に見られる。白雪姫の眠りは、7歳の少女から結婚対象の大人の女性への成熟期間と解釈し得る。

### [15 こん棒で一撃、薪割り・斧で一撃、殴り殺す]

こん棒で一撃するのが3例(主人公と主人公の援助者による救済の手段)、殴り殺すのが2例

(主人公による強奪と準主人公による救済目的)、薪割り・斧で一撃するのが2例(悪人による強奪と殺害目的)、ハンマーで殴るのが1例(主人公の依頼)、計7例ある。被害を被るのは非主人公であり、ほとんどが死に至る。また、この内、こん棒で一撃すること、殴ることで相手を死に至らしめることは、その者の剛健さ、力強さを示唆している。

★KHM 116(青いランプ)：ランプの精が主人公を救済する目的でこん棒で王の家来たちを叩く→死。

無罪ながら死刑宣告を受けた主人公がランプで煙草に火をつけると、ランプから現れた小人は稲光りのようにジグザグにあちこちに飛びました。彼のこん棒にあたると、だれでもすぐぶっ倒れ、もう動かなくなりました〉。

★KHM 166(力持ちハンス)：こん棒で盗賊たちを一撃→身動きができなくなる→捕われの身から自らを開放する。こん棒で小人を一撃→小人の死→魔法が解け姫を救済する。

盗賊が母親と2歳の子を捕らえる。10歳になったハンスは〈こん棒でかしらと盗賊たちに打ち勝ったので、彼らはもう腕と足を動かすことができなくなりました〉。ハンスは母親と共に父親を捜しに旅に出る。……ハンスは岩の中の洞穴で捕らえられている姫の番人をしている小人に対して〈彼のこん棒で一撃を加えると、小人はぶっ倒れて死にました。たちまち鎖は乙女の身体からはずれて落ちました〉。

★KHM 58(犬と雀)：主人公が斧で一撃を受ける→身をかかわして加害者自身が死ぬ。

仲間の犬を馬車に轢かれて亡くした雀が馬と御者に復讐する。御者が呑み込んだ雀が〈彼の腹の中でバタバタ暴れだし、彼の口に出てきました。……御者は斧を妻に渡し、『おれの口の中の鳥を打ち殺せ』といました。妻は……よりによって御者の頭を打ってしまいました。それで彼は倒れて死にました〉。

★KHM 120 (3人の職人)：薪割りで客を一撃→殺害→強奪する。

強奪目的で宿屋の〈主人はおかみさんと一緒に薪わりを持ってきて、お金持ちの商人を打ち殺しました。人殺しをしてから、2人はまた床に入って眠りました〉。……〈『地下室に行ってみなさい。そこには、こいつ(主人)の殺した人がまだ沢山ぶらさがっている』〉。

★KHM 81 (のんきもの)：主人公がハンマーで悪い小人たちを一撃させる→小人の死。

望めば何でも入れ込むことができる魔法のはいのうに主人公が悪い小人たちを入れる。〈ある鍛冶屋に入り、……これを叩いてくれと鍛冶屋は職人に頼みました。彼らが大きなハンマーで力一杯叩いたので悪魔たちは惨めなわめき声をあげました。その後ではいのうを開けると8人の悪魔は死んでいました〉。

★KHM 115 (明かりお天とさまが明るみに出す)：主人公が旅人を殴る→死→金品を強奪する。

金もなく旅をしていた仕立屋は出会ったユダヤ人に〈『おまえはお金を持ってるとも。そいつを出せ』。そう言って、腕づくで相手をさんざんぶったので、ユダヤ人は死にそうになりました。ユダヤ人は死にそうになると、『明るいお天とうさまが明るみに出す』と最後の言葉を言って死にました〉。

\*ユダヤ人が主人公に殴打される類話にはKHM 7 (うまい取り引き)がある。また、KHM 110 (いばらの中のユダヤ人)では、ユダヤ人は高利貸しという職業だけで死刑になる。ユダヤ人は昔話では主人公ではなく、敵対者として登場している。どの話でもユダヤ人は嘘つき、悪者との烙印を押され、当時の反ユダヤ人感情、偏見が伺える。そのため、対応する主人公の行為には正統性がない。

★KHM 161 (雪白とバラ紅)：準主人公が悪い小人を殴る→小人の死。

呪いかけられた王子が熊の姿で宝を盗む悪い小人をく前足で殴りつけました。たった一つぶたれただけで、小人は身動きひとつできなくなりました〉。

## [16 塔(牢)等に隔離]

隔離する場所としては、塔が3例、牢が9例、地下が2例、穴が1例(動物笑い話)、谷間・岩の中が各1例、鳥籠・ガラスの棺・鉄のストーブが各1例、計20例に見られる。塔や牢に隔離する実行者は、魔法使いの1例以外は、王様や王様の命令によるものである。小人は洞穴や山の谷間を隔離場所としており、魔法を使える者は魔力で相手を鳥かごやガラスの棺、あるいは鉄のストーブに隔離する。一般人の場合は地下室が使用されている。

隔離する動機としては、親の溺愛・求愛の拒絶による、誤解による刑罰、悪事への刑罰、課題の解決を条件にするものが各々3例、道徳的戒めが2例、約束を違えたため、不親切な行為のため、服従しないため、領域を侵したため、嫉みのため、呪いによって、復讐の失敗によるのが各々1例ある。男性(父親)が女性(娘)を他の男に渡さないために隔離する現象の中には、病的な溺愛が伺える。

しかし、これらの20例の内、18例では後に救済されており(隔離後の死刑が1例、記述がないのが1例)、話の展開上の一時的な隔離に過ぎないと解釈できる。

★KHM 12(ちしゃ=ラプンツェル)：魔法使いが娘を塔に閉じ込める→娘の居場所が知れると魔法使いは娘を荒れ野に隔離する。

魔法使いに育てられた娘は〈この世の中に2人といないほど美しい女の子になりました。12歳になると、魔法使いの女はラプンツェルを森の中の塔に閉じこめました。その塔には階段も戸もなく、一番上に、小さな窓が1つあるばかりでした〉。娘の居場所が王子に知れると、魔法

使いは、『この罰当たり目。なんということだ。おまえを世間から遠ざけておいたのに、よくもわしを騙した』> といって娘の髪を切り落とし、荒れ野原に追い出す。

★KHM 198 (マレーン姫)：王が姫を塔に閉じ込める→7年後自力で脱出する。

娘を愛するあまり、異国の王子と結婚させたくない父親は、<怒って、太陽の光も月の光も差し込まない暗い塔を建てさせました。……姫とお付きの娘が中に入れられ閉じ込められ、天地から引き離されました。……姫とお付きの娘が交代で<パンを切るナイフで石のしっくいを掘ったり、穴を開けたりしました。……壁の穴が大きく開いて、抜け出られるようになると、先ずお付きの娘が飛び下り、マレーン姫が続いて降りました>。

★KHM 76 (なでしこ)：王が誤解から妃を塔に閉じ込める→7年後に王子が真実を証して救済される→救済3日後に妃の死。王が悪巧みをした料理人を牢に閉じ込める。

料理人は王子を盗み、その罪を妃にきせる。彼は王に<王子が獣に盗まれるのを許したのは妃だ、と訴えました>。<王様は……たいそう腹を立てて、日も月もささないような奥深い塔を作らせ、妃を入れさせ、壁で塗込めてしまいました>。……料理人の悪事が明るみになると王は<怒って、一番深い牢屋に放り込め、と命令しました>。料理人はその後四つ裂きの刑となる。

★KHM 6 (忠実なヨハネス)：主人公が妃の命を救う→王の誤解から受牢される→死→石化→主人公の真意を悟った王が救済する。

主人公は倒れた妃の乳房から血を3滴吸い取ると妃が生き返る。<若い王様は、それを見ていて、なぜ忠実なヨハネスがそんなふうにしたにか知らなかったので、腹をたてて、『あいつを牢屋に放り込め!』>と叫びました。あくる朝、忠実なヨハネスは死刑の宣告を受けて、首くくり

台に連れて行かれました>。主人公は真実を述べ石化する。主人公の忠誠を知った王が自分の子供を生贄にすることで主人公は再生する。

\*KHMにおける石化は死と同一視されている一方で、隔離の一手段であり、誤解への王様の懺悔には十分な苦しみの期間となっている。自分の子供の首を切った血をぬって再生させるモチーフは、宗教的伝説によるものである。

★KHM 57 (金の鳥)：主人公が課題の解決に失敗する→王によって牢に入れられる。

最初は金の鳥、次に金の馬、次に金の城から美しい姫を連れてくるという王からの課題の解決に失敗した王子は裁判で3度牢屋に入れられ、死刑の判決を受ける。その都度次の課題解決を条件に開放される。

★KHM 94 (賢い百姓娘)：王から分けってもらった畑で見つけた金の白を父親は『白ばかりで杵がないとすりゃ、杵も手に入れなくちゃならないことになるわ』>という娘の忠告を聞かずに王に提供すると、<お百姓は牢屋に入れられ、杵を手に入れるまでは牢屋に入っているとされました>。主人公に賢い娘がいることを知った王は、謎掛けをするためにその娘を連れてくることを条件に解放する。

★KHM 96 (3羽の小鳥)：王の誤解で妃を牢に入れる→誤解が解けて王が妃を救済する。

<妹たちは王様に『お后は猫をお産みになりました』>と言いました。王様は怒ってお后を牢屋に入れさせました。お后は牢屋に幾年も入っていました。妹たちの悪事が判明し、王は<牢屋を開けさせ、お后を外に出しました>。

★KHM 107 (2人の旅職人)：課題の解決ができなければ受牢が申し渡される→主人公が助けた動物たちの助力を得て課題解決をして受牢を逃れる。

仕立屋が城をそっくり蠟で型どることができなければ王は彼を<一生の間地下の牢屋につないでおく>と言う。

★KHM 116 (青いランプ)：主人公の復讐→失敗→投獄され死刑の判決を受ける→ランプから現れた小人の力で脱出する。

王に解雇された兵隊は姫をさらい、復讐を試みる。〈小人の勧めで町の門から逃げ出しましたが、間もなく追い付かれ、牢屋に投げ込まれました〉。〈ある日、兵隊に対し、裁判が行われました。彼は何も悪いことをしなかったのに、裁判官は彼に死刑を宣告しました〉。

★KHM 170 (苦楽を共に)：妻に暴力を振るう仕立屋に対する戒めの目的で牢屋に入れる→改心が認められ解放される。

〈お上は彼を呼び出して、心を入れ替えさせるため、牢屋に入れました。仕立屋はしばらく水とパンで暮らしてから牢屋を出されました〉。

★KHM 199 (水牛の皮の長靴)：恐いもの知らずの兵隊は魔力を持つワイン瓶で盗賊たちを捕らえる。〈彼らを袋のように車の上に投げ込ませ、『まっすぐ牢屋に連れて行け』と言いました〉。

★KHM 91 (土の中の小人)：王がりんごの木に呪をかける→王の3人の娘が呪にかかる→娘は地下に沈む→狩人が救済する。

りんごの木から実を取った3人の娘が〈その実にかぶりつきました。すると、3人とも土の中深く沈んでしまったので、もうだれも見つけることができなくなりました〉。娘たちは頭の沢山ある竜の元に隔離される。狩人が竜を退治して3人が救済される。

★KHM 169 (森の家)：年寄りと動物に対して不親切な行為の戒めとして2人の娘を地下室に隔離する→改心するまで下働きをさせる(解放された記述はない)。

動物たちに食べ物も与えない不親切な2人の娘にたいし、〈老人は落とし戸を開いて、娘を地下室に降ろしました〉。〈2人はほくが地下室に閉じこめた。明日2人は森の中に連れて行かれ、心を改め、可哀想な動物にひもじい思いをさせ

ないようになるまで、炭焼きに下女として奉公させられる』。……親切な娘に逢うまでを条件に、魔女によって老人と動物の姿に変えられた王子と召し使いたちは、末娘の親切な行為によって解放される。

★KHM 171(みそさざい)：動物童話。鳥たちがみそさざえを穴に閉じ込める→みそさざえは番人役の梟のすきを見て自力で脱出。

鳥の王になることを妬んだ鳥たちは鼠の穴に逃げ込んだ名もない小さな鳥を〈その穴に虜にして、飢え死にさせようと思いました〉。〈両方の目がふさがると、梟はたちまち眠ってしまいました。小さい鳥はすぐにそれに気付いて、こっそり逃げ出しました〉。

\*みそさざいは体が小さいが知恵が優れているという類いの話は日本でも広く分布している。例「みそさざえは鳥の王」。

★KHM 97 (命の水)：2人の王子(主人公の兄)を小人が呪い、険しい山の谷間に閉じこめる→主人公の頼みで小人が解放する。

命の水を求めて旅にでた王子は出会った小人の問いかけを無視したため〈小人は腹を立てて、王子に呪をかけました〉。〈王子は……険しい山の谷間に入り込みました。……馬の向きを変えることも、馬の鞍から降りることもできず、牢屋に閉じ込められたようになりました〉。2番目の兄も同様な目に合う。

\*水は光とともに最も貴重なものであり、生命に関わる様々な魔術的、あるいは象徴的行為に用いられている。「生命の水」はKHMでは3話に見られ、「生命の木」、「生命のりんご」などのモチーフに共通する。

★KHM 166 (力持ちハンス)：悪い代官が姫を岩の中に閉じ込める→小人に命じて姫を隔離する→主人公が姫を救出する。

姫は、〈無法は代官のため故郷からかどわかされ、代官の言うことを聞かないので、この岩の中に閉じ込められたこと、代官が小人を番人に

したこと、小人がさんざんに自分を悩まし、苛めたことを話して聞かせました。

★KHM 69(ヨリンデとヨリンゲル)：魔女によって若い娘(許嫁のヨリンデ)が小鳥に変えられる→若者(ヨリンゲル)が不思議な力を持つ花の力で呪いを解く→ヨリンデを救済する。

くもし若い娘が同じように(城に)近づくと、お婆さんはその娘を小鳥に変えて、籠の中に閉じこめ、籠を城の一室に持っていきました。そういう珍しい鳥の入った籠をお婆さんは7千も城の中にもっていました。くヨリンデは夜鳴きうぐいすに変えられました。

★KHM 163(ガラスの棺)：娘は魔法使いの男の求婚を拒む→魔法使いが姫を穴蔵のガラスの中に閉じ込める→主人公が姫を救出する。

く『魔法使いは私を牢屋の中に置き去りにしていなくなりました。私はそのまま深い眠りに襲われました……』。く『早く私を牢屋から救い出してください。このガラスの棺のかんぬきを外してくれさえすれば、私は助かるの』と、少女は叫びました。

★KHM 127(鉄のストーブ)：く一人の王子が年寄りの魔女の呪いにかかって、森の中で大きな鉄のストーブの中に閉じこめられていました→森に迷った姫が森から出る道を教えてもらったお礼に救済する→鉄のストーブから男が王子の姿で解放される。

\* 炉やストーブは、火のある場所として家の精や神霊の場所として、また神託や魔術が行われる場所として古くから崇拜されていた。炉やストーブに悩みや秘密を打ち明けるモチーフはKHMでしばしば用いられている。

★KHM 136(鉄のハンス)：深い水たまりの水をかきだすと、これまでに多くの悪事を働いてきたく身体がさびた鉄のように赤茶けた色の山男が横になっていました。……山男を縄でしばってお城につれていき……王様は山男を鉄のかごに入れ……→金のまりを返してもらう条件

で王子が鍵を渡し救出する。

### [17 森の中への子捨て]

子供を森に置き去りにするのが4例(内、聖者伝説1例)、森で殺害を命じるのが2例、子供を危機から守る善意の目的で森に隔離するのが1例、計7例ある。また、寒い戸外で子供を凍死させようとするのが1例ある。森に遺棄されるのは、主人公または準主人公であり、総ての場合、命を落とすことなく自力で脱出するか、猟師や小人の救済者が現れる。子供を森に遺棄する他に、KHM 29(金の毛が3本ある鬼)、KHM 92(金の山の王様)に見られる子供を川に流すのも同種のモチーフに分類し得る。

KHMに見られる子捨ての理由は、実親が子供を危機から守る目的、苦しい生活事情、噂などの誤解、継母の嫉妬や悪意などとその行為の要因は様々である。遺棄する主な場所は、一度入り込むと脱出が困難な深くて暗い森である。

遺棄された主人公は第三者によって奇跡的に救出され、その後、偉大な人物になるか幸せを手中にすることが多い。また、KHM 15(ヘンゼルとグレーテル)に見られる飢饉の史実(13世紀後半と14世紀中頃のヨーロッパの飢饉)はフランスのペローの童話やイタリアの民話にも多く投影されている。なお、継子への殺害計画や苛めは、森に捨てるモチーフに限らずにKHMでは広く用いられている。

★KHM 15(ヘンゼルとグレーテル)：飢饉から母親が2人の子供を森に遺棄する→兄妹が協力して森と魔女の家から脱出する。

貧しさから夫婦の妻はく『森の中で子供をおいてきぼりにしましょう。子供は帰り道が分からないから厄介払いができますよ』と夫に提案し、実行する。

★KHM 60(2人の兄弟)：兄のそそのかしで弟は自分の2人の子供を森に遺棄する→親切な猟師によって救済される。

悪魔が子供たちにとり憑いていることを兄に言われた弟は〈悪魔を恐れていたの、たいへん辛いことでしたが、双子を森の中へ連れだし、悲しい思いで置き去りにしました〉。

★KHM 33 (3つの言葉)：伯爵が愚かな息子を森で殺害させる→家来の同情で逃がれる。

修行に出しても動物の話が解ること以外何も覚えられなかった息子に対して伯爵は『こいつはもうわしの息子ではない。わしはこいつを追いつ出す。わしの命令じゃ、こいつを森の中へ連れて行き、命を奪え』。

★KHM 53 (白雪姫)：嫉妬する継母が森で娘の殺害を狩人に命じる→狩人の同情で逃れる。

継母は〈狩人を呼び寄せて言いました。『あの子を森の中へ連れていきなさい。私は、あんな子をもう目の前に見たくない。あれを殺して、肺と肝を殺した証拠に持ってきなさい』〉。

★KHM 179 (泉のそばの鶯鳥番)：王が3人の娘に自分に対する愛情の度合いを述べさせる→末娘の返事に怒った王様は森に遺棄することを命じる→魔女が娘を保護する→魔女が王を戒める→3年後に親元に戻す。

父親を塩のように愛してるとの末娘の答えに〈王様は国を上の人2人の娘に分け、末の娘には、背中に塩の袋を結びつけさせました。2人の僕が彼女を恐ろしい森の中に連れて行くように言いつけられました〉。〈王様は自分がひどくつれない仕打ちをしたことを後悔して、森中を捜させました〉。……捨てられた子供を引き取り育てた魔女は、〈『あなたがたは、心配の内に暮らしました。それで十分罰を受けたわけです』と仰いました〉。

★KHM 49 (6羽の白鳥)：父親が子供を守るための善意から森の城の中に隔離する→母親の魔女に見つかり白鳥の姿に変えられる。

〈王様は今度の継母が子供たちを苛めるどころか、もっとひどいことをしやしないかと、心配になりましたので、子供たちを、森の奥深く

にポツンとたっている寂しいお城に連れて行きました〉。

★KHM 201 聖者伝説1番 (森の中のヨーゼフさま)：母親は〈末の娘を嫌いました。それで、母親はこの可哀想な娘をたびたび大きな森の中に行かせ、末娘を厄介払いをしようとしてました。娘が道に迷って2度と帰ってこなくなるだろうと思ったからです〉。

★KHM 13 (森の中の三人の小人)：継母が娘に難題を科し、戸外へ閉め出し殺害を企てる→娘は森の中の小人の家を訪れる→親切な心を備えていたため小人が課題達成を援助する→娘は家に戻る。

継母は、実の娘に比べて美しい継子に対して嫉妬心から寒い日に、〈外に出れば、この子は凍えて飢え死にするだろう。2度と私の目の前に出てこられまいと、継母は考えました〉。継母は女の子に紙の服を着せ固いパン一切れを持たせて苜をつませる課題、煮た糸と斧を女の子に持たせ、凍った川で氷に穴を開け、糸をすすぐ課題を科す。

## [18 特に方法の記述がない死刑]

人の命をねらったり、死刑にするモチーフは、未遂も含め、KHMには頻繁に用いられている。ほとんどの場合、その方法、使われる道具などが明示されている一方で、明確な記述がないのは以下の3例のみである。

★KHM 17 (白い蛇)：結婚を条件に姫が主人公に課題を科す→動物の助けで解決→主人公は姫と結婚する。

主人公の若者は、課題が解決できれば夫になれるが、できなければ死刑にする、と姫に言い渡される。〈若者は庭に腰掛けて、どうしたらこの問題を解くことができるか、考え込みましたが、何も思い付かないので、すっかり悲しくなると、夜が明けると死刑にされるのを待ち受けました〉。白い蛇の肉を食べて動物の言葉が理解で

きた主人公は、以前に助けた動物たちの恩返しで、数々の課題を解決して姫との結婚を果たす。

★KHM 40(盗賊のおむこさん)：盗賊の悪事が判明する→取り押さえられ死刑になる。

花嫁が婚礼の席で盗賊の悪事を明らかにすると、盗賊は、飛び上がって逃げようとしたのですが、お客さんたちが彼を取り押さえ、お役人に引き渡されました。それで、彼とその仲間は残らず、悪事を働いた罰として、死刑にされました。

★KHM 115(明るいお天とさまが明るみに出す)：強奪目的で仕立屋が無実のユダヤ人を殺害する→仕立屋は裁判で死刑になる。

〈仕立屋は裁判にかけられ、死刑にされました。やっぱり、明るいお天とさまは明るみに出したわけです〉。

## [19 自殺]

死に関わる行為、とくに死を覚悟した冒険、命をかけた課題の解決、生と死を境とした救済などのモチーフは、話の展開において緊張感を高め、課題の困難さを誇張し、KHM では有用な作用を成し、とても好まれている。この点から、ネガティブで発展性のない自殺という行為は KHM では極めて稀で、以下の4例(内1例は笑話)しかない。ハッピーエンドに終わる主人公の成功に衝撃を受けての自殺が2例、絶望感からの自殺未遂が1例、欲望のあまり死をほめかすのが1例ある。

★KHM 55(がたがたの竹馬小僧)：小人が妃に課題を科す→課題が解決されたことに怒り小人は自殺する(自ら身を引き裂く)。

后が小人の名前を言い当てると小人は〈腹立ち紛れに、右足で地面を踏むと、腰まで土の中に埋まってしまいました。そこで、今度はいかんしゃくを起こし、左足を両手でつかんで、自分の身体を真っ二つに引き裂きました〉。

\*悪魔や小人が人を出し抜く、また、人が悪

魔や小人の鼻を明かしたり出し抜くといったモチーフは昔話に広く用いられている。しばしば小人は計画通りに事が運ばないと怒りを極端に表すものである。芥川龍之介の『煙草と悪魔』にも同系のモチーフが伺える。

小人が自ら命を絶つこの詳細な描写は、草稿と初版では単に「スプーンに乗って窓から飛んでいきました」、「小人は怒って飛び出して行き、2度と帰ってきませんでした」と記されており、ウィルヘルムが第2版以降に書き加えた誇張表現である。

★KHM 101(熊の皮男)：2人の姉は花嫁になる夢が断たれる→怒りと落胆から自殺する(井戸に身投げ、首つり)。

2人の姉は、〈きれいな男の人が妹のものになっているのを見、それが熊の皮男だったと聞くと、かんかんに怒って駆け出して行きました。そして、1人は井戸で溺れ死に、1人は木で首をくくりました〉。〈悪魔は、『どうだい、おまえの魂1つの代りに、2つの魂を手に入れたぜ』と言いました〉。

★KHM 185(墓の中のかわいそうな男の子)：笑話。主人公は、叱られる恐怖から自殺を決意する→毒と思って葡萄酒を飲み墓で横になる→酒の熱と夜露の寒さで死。

主人に命じられた藁切りの仕事に、藁と一緒に上着を切ってしまった男の子は、〈『意地悪いだんなは……おれのやったことを見たら、おれを打ち殺すだろう。いっそ自分で死のう』〉と毒を探す。毒と思ってはちみつと葡萄酒を飲み墓を探す。〈可哀想な男の子は2度と目を醒さず、強い葡萄酒の熱と、冷たい夜露に命を奪われました〉。

★KHM 12(ちしゃ＝ラプンツェル)：魔法使いの庭に植えてあるちしゃを妻が欲する→夫が盗む→産まれてくる子供を魔法使いに渡す約束をする。

〈『あ、うちの後ろの庭にある、ちしゃを食べ



ることができないなら、私は死にます』。……私はほんとうに仕方なしに、こんなことをする気になったのです。妻が窓から、お宅のちしゃを見て、たいそう食べたがり、食べられなければ死ぬと言うものですから』と、夫は言って謝りました。

## [20 その他(事故死, 疲れての死)]

★KHM 186 (ほんとの花嫁)：継母は自分で半開きにしておいたはね戸が落ちたので、継母は下に転げ落ち、死んで床の倒れました。

★KHM 187(兎とはりねずみ)：動物童話。兎がはりねずみと駆け競べをする。兎はもう終に走れず、……喉から血を流れて、兎はその場で死んだきりでした。

## [21 その他の残忍な描写]

★KHM 4(怖がることを習いに旅に出た男の話)：死体が落ちてくる→死体の部分がくっつく→骨としゃれこうべで遊ぶ→死体と寝る。

〈人間の身体が半分煙突から降りてきて、少年の前に倒れました。……あとの半分が落ちてきて、……2つがくっついて、恐ろしい人間になり、少年の席に座っていました〉。死人は、〈死人の骨を9つとしゃれこうべを2つ持ってきて、柱を建て、九柱戯をして遊びました。少年もやってみたくなりました。……少年はよく転がるようにしゃれこうべを取り上げ、旋盤にかけてぐるぐる回し、丸く削りました〉。少年は棺桶の中の死体が冷たいので、棺桶の中の死人を引っぱり出し、火の傍に運び、自分の膝の上に寝かせました。……それでもさっぱり効き目がなかったので、……その死人をベッドに入れて、ふとんをかけ、自分もその横に寝ました。

★KHM 9(12人の兄弟)：女兒の誕生を条件に男の子供の殺害を企てる→男の子供たちが復讐を誓う。

王は女の子の誕生の代わりに12人の男の子

の殺害を妃に伝える。〈『今度、そなたが産む13人目の子が女の子だったら、12人の男の子を殺し、姫の財産が大きくなり、王国を姫だけのものになるようにしよう』。王様は、12の棺を作らせました。棺にはかんな屑がいっぱいつまり、1つひとつに死体のための枕が入っていました〉。〈『僕たちが女の子のために死ななければならないなんて！誓って復讐しよう。女の子を見つけたら、赤い血を流させてやろう』〉。〈『僕たちは女の子に出っくわしたら、だれでもかまわず殺すことに決めただよ』〉。

★KHM 16(3枚の蛇の葉)：死者と生きたまま埋葬する→死者を生き返らせる。

〈姫様は、自分が先に死んだら、生きたまま自分と一緒に埋葬されると約束する〉ことができる男と結婚する。姫が先に死ぬと若い王は、蛇が緑の葉で生き返るのを見て、死者を生き返らせる。

★KHM 46(フィッチャーの鳥)：魔法使いの花嫁の代りに死体を飾る→魔法使いと仲間が集まる→家に閉じ込め魔法使いたちを焼死させる。

〈花嫁は……歯をむき出している死人の頭を取り出し、それに花環をかぶせて、天窓に持ち上げ、そこから外をのぞかせました〉。〈花婿が見上げると、飾られた死人の頭が見えたので、これは花嫁だろう、と思い、うなずきかけ、打ち解けて挨拶しました〉。

★KHM 56(恋人ローラント)：魔女が過って自分の娘を殺害する→主人公はその死体の血を追跡から逃れるために用いる。

〈娘は……死人の首を手にとって、血の滴を3つ床にたらしめました〉。魔女の娘への呼び掛けに3滴の血が応える。〈そこでもう1度『おまえはどこにいるの?』と呼びました。『あら、この寝床の中よ』……魔女は寝床の傍にいてみました。……自分自身の子供が血の中に浮いていました。彼女は自分の手で子供の首をちょん切っ

たのでした。

\*生命素材の総括概念である血は、例え死人の血であれその人間の生命力を宿し、活性を備えている。3滴の血が新しく誕生する命を予告したり、子供の血をぬって死者の生命を取り戻させるなど、KHM ではしばしば用いられているモチーフである。また、血の犠牲や血の洗礼は古代ゲルマンの礼拝でも行われており、宗教的意味合いを多分に含んでおり、世界の童話や伝説に広く流布している。

★KHM 60 (2人の兄弟)：人身御供→猟師が竜退治して救済する。

猟師は何故町に〈喪の薄い絹がはりめぐらされているのかと、(宿屋の)主人に尋ねました〉。〈『町はずれに高い山があって、そこに竜が住んでいます。そいつが毎年ひとりの清い娘を取らないと承知しないのです。でないと、国全体を荒らすんです。……お姫様の他には1人ももう残っていないんです』〉。

\*昔、生贄として神に人の身体を供えた、あるいは魔物などの欲望を満足させるために人の身体を犠牲にした宗教的な俗習の人身御供が頻繁に行われた史実は、世界の多くの伝説や説話に伺える。日本の昔話でも「八岐大蛇」「猿神退治」など非常に多くの話が流布している。KHM では、直接に人身御供として描かれているのはこの1例のみであるが、この色彩をおびた話、つまり、願い事や欲望の成就を人の命と交換条件とする話は数多い。

★KHM 117 (わがままな子供)：墓の中なら出てくる手。

わがままな子が病死し、その子の埋葬の際に、何度土をかけても子供の手が土から出てくる。

母親が鞭で打つとようやく腕は引っ込む。

★KHM 192 (泥棒の名人)：主人公は名人技を証明するために自分の身替わりに死体を使う→伯爵夫人の指輪とシーツを手に入れる課題を達成する。

〈泥棒の名人は闇の中を首くくり台にいき、ぶらさがっていた可哀想な罪人を縄から切り離して、背中にかついでお城に運びました。そこで寝室にはしごをかけ、死人を肩ののせて登り始めました〉。〈死人の頭が窓の中で見えるようになると、……中で見張っていた伯爵はそれをめがけてピストルの引き金を引きました〉。

[一完一]

#### 参考文献

- 1) 高橋健二訳：グリム童話全集 I・II・III；小学館，1976.
- 2) 高木昌史：グリム童話を読む辞典；三交社，2002.
- 3) 阿部謹也：西洋中世の罪と罰；弘文堂，1997.
- 4) 日本昔話事典；弘文堂，1977.
- 5) 満足忍：グリムメルヒェンのモチーフを探る(3)―刑罰と残忍性(上)；研究紀要日本大学歯学部 (一般教育)，2002.
- 6) 同上(4)―刑罰と残忍性(中)；日本大学歯学部研究紀要，2003.
- 7) 鈴木晶：グリム童話；講談社現代新書，1991.
- 8) Wörterbuch der deutschen Volkskunde；Alfred Kröner Verlag, Stuttgart, 1974.
- 9) Wörterbuch der Völkerkunde；Alfred Kröner Verlag, Stuttgart, 1965.
- 10) Wilhelm Straub：Kinder und Hausmärchen der Brüder Grimm；Herder Freiburg, 1950.
- 11) Grimms Märchen in ursprünglicher Gestalt；Insel-Bücherei Nr. 837.